○カナクギノキの語源　(倉田　悟)　Satoru KURATA: Etymological consideration on the Japanese name of *Lindera erythrocarpa* Makino.

昨夏，宮崎県児湯郡三納村の国見山に登り瀧一郎氏と共にホコガタシダ・ホオノカワシダ・オニコケシノブを採集した。その際，案内の大杣頭さんから，カナクギノキをナツコガと呼ぶことを聞いた。ところが東三河では常緑のカゴノキをフユガノコと呼び，落葉するカナクギノキにナツガノコの方言がある (山本陸：三河三輪村の植物方言，昭和25年)。カナクギノキも老木になると樹皮が小片となつて剝落するのでかかる方言があるが，高知営林局編四国樹木名方言集 (昭和 11 年) によれば高知県香美郡在所村ではコガ，又同県幡多郡津太村ではカツコと呼ばれる。更に農商務省山林局編日本樹木名方言集 (大正5年) にはナツコガという方言が掲げられ採集した地方は記されていないが，之は三納村の方言と全く一致する。

カナクギノキという和名は水谷助六の木曾採薬記にあり，飯沼慾齎の草木図説木部には単にカナクギとある。牧野日本植物図鑑には「和名ハ鉄釘の樹ノ意ナランモ何ノ為メニ斯ク名ケシ乎不明ナリ，而シテ材質ハ堅緻ナラズ」とあるが，伊勢 (久保文良氏より聞く) や大隅 (山林局の方言集) にはヌカガラ，紀伊には粟ガラノキの方言がある如く，事実，材は軟かい。白井光太郎先生の遠州秋葉山の樹種名方言にはカナクギノキはカナコとなつている。以上を綜合して，カノコ→カナコ→カナコ木→カナクギ→カナクギノキの変化を想定した。最近になつて，既に前川文夫氏 (植雜 **60**: 104) に同様の説を出して居られることを知つたが，独立に考えたことであるし，新しい材料もあるので敢て此処に書いた次第である。尙カナクギノキを木釘に利用するという報告はあるが再検討したい。

○泰西の肉桂と古代日本の桂との連關に就て (其二)　(藤田安二)　Yasuji FUJITA: The relation between the name Cassia in the West and Katsura in the ancient Japan (2)

私は前報[1]の如く我国に於ける古事記の香木 Katsura が肉桂であつて，泰西の Cassia の起源なる Assyria の Kasu に連関するものなる事を主張し，又現在種子ケ島に於てマルバニッケイ *Cinnamomum daphnoides* Sieb. et Zucc. を Tsunname と呼び，宝島方面にて Tsun-noki 又は Chun-noki と呼ぶのは均しく西方の肉桂 Kinnamon の東方への伝播の島嶼的残存であると考えるが，これ等はすべて原始古代に於ける民族移動によるもので，我国に於ける Katsura は実体でなくて植物の名称のみ，その地自生の近似種にうけつがれつつ伝播したものであり，この意味に於てこの事は恐らく我国に於けるニッケイ *C. Loureirii* Nees の自生及び極めて古くからの栽植を示すものと見る。

さて我国への民族移動の主流が南方からのものであるならば更に南方に於て，これ等の事実を示すに足る肉桂の名称伝播の残存があつていい筈である。これに関する事実は

南海に於ける民族移動の一つの停滞地とも考えられるフィリッピン群島に於て容易に見出される。

即ちフィリッピンに産する *C. Mercadoi* Vidal はこれを Luzon 島北部西海岸地方及びルソン海峡 Babuyan 諸島中の Calayan 島等に住する Ilokano にて Kasiu[2] と呼ぶ事である。これは明かに Kasu 系に属し，我国の Katsura に連るものと言える。フィリッピンに於ける Spain 系の肉桂の呼称は Canela であつて，又 Kanila, Kanilau, Kanilao 等となつて本種及び *C. Burmanni* Bl., *C. mindanense* Elm. 等に広くあてられる。この事から言つても Kasiu は決して近世のものではない。

次に更に興味ある事実は *C. Mercadoi* をフィリッピン Tagalog にて Samiling, Similing[2] と呼ぶ事であつて，これこそ現在印度 Madras 近くに行われる Dravida 系の Telugu 語で *C. zeylanicum* Breyn. を呼ぶ Sanalingu, Sanalinga[3] に一致する。この Sanalingu は恐らく肉桂を示す極めて古い土語であつて，この言葉が印度を出てフィリッピンに伝つている事は肉桂を示す Kasu も亦古代オリエントより印度を経て南海に出でフィリッピン及び我国に及んでいる事を充分に示す。

なお台湾に於てタイワンニッケイ *C. pseudo-Loureirii* Hay. を Paiwan にては Marukami[4] と呼ぶが，これは Mindanao 島に於て Bagobo の肉桂近似の *C. mindanense* を呼ぶ Kami[2] なる呼称の流れをくむものなる事が明かである。

又フィリッピンにては Negros, Cagayan 等にて *C. Mercadoi* を Kuliuan, Kuliun, Uliuan[2] と呼ぶが，これはインドネシア一般の *C. culilawau* Bl. の呼称 Kulilawan 及び Java にて *C. javanicum* Bl. を呼ぶ Kulitlawang kechil[5] と同様明らかに Kulilawan 系であつて，以上のいずれもが明らかに民族の流れの南方からの北上を示すものである。

(大阪工業技術試験所)

文　献

1) 藤田：台湾博物学会会報，**34**：350 (1944)；植研，**25**：63 (1950)；**26**：303 (1951)；香料，**20**：32；**22**：10 (1952).——2) Brown: Minor Prod. Phil. Forest, **2**: 200 (1921); Merrill: Enum. Phil. Flow. Pl. **2**: 187 (1923).——3) Kirtikar, Basu: Ind. Medic. Plts. **2**: 1101 (1918); Watt: Com. Prod. Ind., 313 (1908).——4) 金平：台湾樹木誌，209 (1936).——5) Burkill: Dict. Econ. Prod. Malay Penins., 552 (1935).

○ミヤマウメモドキ　(原　寛)　Hiroshi HARA: The identity of *Ilex nipponica* Makino.

東北から中部，近畿地方の山地水湿地に見られるウメモドキの一種に，ホソバウメモドキ *Ilex spathulata* Koidzumi と名付けられ，近年は往々オオバウメモドキ *I. Nemotoi*